

中国と国際ビジネス

—「国際ビジネス学会」年次大会（北京）—*

八木 三木男（京都産業大学）

序

外国企業の活動が中国経済の驚異的な高度成長に貢献している。この事実とはとくに直接投資と国際経営の研究分野において注目を集めている。筆者は、幸いにして北京市で開催された「国際ビジネス学会」年次総会に参加する機会を得た。その経験を踏まえて、国際ビジネス研究に、中国経済の躍進がどのような刺激を与えているかという課題について考えたいと思う。国際ビジネスに関する学会展望を行うことは筆者の能力を超えているが、中国経済研究の一道程として報告する。

第1節 「国際ビジネス学会」の紹介

「国際ビジネス学会」について、Web と学会機関誌に公表されている情報を紹介する¹。国際ビジネス学会 The Academy of International Business (AIB) は国際ビジネス分野の研究者および専門家の学会であり、アメリカのミシガン大学に本部がある。1959年に設立され、会員数は、現在、74カ国から3262名である。研究機関の学者だけではなく、コン

* 本研究は、京都産業大学 ORC 中国経済プロジェクトによる資金援助を受けて、2006年6月22-27日に中国北京市で開催された「国際ビジネス学会」年次大会に出席し、大会報告を中心にまとめたものである。このような研究機会を与えられたことに対して感謝いたします。

¹ <http://aib.msu.edu/> による。

サルタント、調査員、NGOメンバーなども参加している。また、先進国諸国からだけではなく、発展途上国からも多くの会員がいる。会員数の多い国は、次のようになっている。アメリカ 1419 名、イギリス 288 名、カナダ 178 名、日本は 137 名、オーストラリア 124 名、台湾 122 名、ドイツ 78 名、中国 76 名、韓国 71 名、等である。

国際ビジネスは範囲の広い研究分野である。この学会の会員の主な専門分野は、マネジメント (MANAGEMENT) 1772 名、企業政策 (BUSINESS POLICY) 1034 名、マーケティング (MARKETING) 920 名、経済学 (ECONOMICS) 716 名、組織論 (ORGANIZATION) 416 名、ファイナンス (FINANCE) 310 名、人的資源と労使関係 (HUMAN RESOURCES & INDUSTRIAL RELATIONS) 190 名、教育と国際ビジネス (EDUCATION & IB) 106 名、会計と租税 (ACCOUNTING & TAXATION) 86 名、国際関係と政治学 (INTERNATIONAL RELATIONS AND POLITICAL SCIENCE) 70 名、などである。

学会会員が興味をもっている主な研究テーマは、企業政策・企業戦略 (Business Policy - Business Strategy) 979 名、マネジメント・異文化マネジメント (Management - Cross-Cultural Management) 827 名、マーケティング・国際マーケティング管理と戦略 (Marketing - International Marketing Management & Strategy) 612 名、ビジネス政策・グローバル競争と市場 (Business Policy - Global Competition & Markets) 559 名、経済学・外国直接投資と多国籍企業の理論 (Economics - Theory of FDI and the MNE) 539 名、組織論・異企業組織 (合併、提携、ネットワーキング (Organization - Inter-firm Organizations (JV, Alliances, Networking)) 535 名、マーケティング・輸出入・外国市場参入様式 (Marketing - Export/Import: Foreign Market Entry Modes) 395 名、マネジメント・比較マネジメント (Management - Comparative Management) 390 名、などである。学会会員の主流は国際経営やマネジメントであるが、学際的な研究対象であるので、多様な分野の研究者が参加している。ビジネスに身を置く実務家も参加している²。

日本には、この国際ビジネス学会の日本支部 (AIB Japan Chapter) があり、1994 年に設立された日本国際ビジネス研究学会 (JAIBS、Japan Academy of International Business Studies)がある³。

北京学会の運営について

(1) 国際会議場とホテルは、第 4 環状道路に沿って北京市の北部にあり、オリンピック村の予定地に隣接している。ホテルは国際会議場と並んでいて、参加者は歩いて数分で

² 筆者の専門は、上記の分類によれば、日本＝経済学＝外国直接投資と多国籍企業の理論、の分野であり、この学会では主要分野ではないように思われる。

³ http://aib.msu.edu/community/chapters/rep_j00.asp に掲載された情報による。

往来できる。この場所には、現在、飛行場からは高速道路しか利用できない（オリンピックまでには、飛行場から地下鉄が通じるとのこと）。また、北京市の中央部からもかなり時間（約 30 分）がかかり、タクシーしか交通機関はないようだ。付近一帯は、高層マンションが並び、多くの工事現場が見られる。

（２） 学会のホスト役は北京大学光華管理学院（Wu Zhipan 学院長、Changqui Wu 教授）である。私は学院を訪問する機会がなかったが、水準の高い教育機関のようである。学会運営にもこの学院の学生が協力していた。また、協賛団体である韓国企業の三星（Samsung）中国がかなりの金銭的支援を行っているようである。韓国企業の勢いとともに、中国と韓国との密接な経済的関係を象徴している。

（３） この会議への参加者の総数は、1055 名である⁴。国籍別の参加者数は、米国 334 名、英国 98 名、中国 83 名、台湾 69 名、カナダ 64 名、日本、オーストラリア各 53 名、韓国 32 名、シンガポール 27 名、香港 26 名、などで、アメリカからの参加者が圧倒的に多い。プログラム委員長はメアリー・アン・フォン・グリノウ教授（Mary Ann Von Glinow、フロリダ大学）で、専門分野のプログラム委員には米国の大学の研究者が多い。

（４） 参加者には、中国人研究者が多かったが、彼らのほとんどはアメリカの大学で学位をとり、アメリカで教鞭をとっているように思われる。中国からの留学生がアメリカの中国経済研究を支えているものと推察される。中には、この学会に参加する機会に故郷に親族を訪ねる若い中国人にも何人か会った。アメリカの中国理解あるいは米国企業の中国進出には、これらの人材のもたらす恩恵ははかりしれないという印象を受けた。

第 2 節 プログラムから見た中国経済への視座

まず、優れた経営者として Award を受けたのは、Lenovo が所属する Legend Holdings Ltd の社長兼 CEO で、最近の IBMPC 部門の買収の立役者である Chuanzhi Liu である。

4 名のキーノート・スピーカーがいる。まず、北京大学光華経営大学（開催校）で学院長の Weiyang Zhang であり、彼はオックスフォード大学の学位（経済学博士）をいいて、中国においてビジネスに関する教育改革と経済政策に影響を与えている国際派の若手研究者と見られる。彼の講演テーマは “Competitiveness of Chinese Enterprises in the Global Era” である。つぎに、エモリー大学マーケティング教授の Dr.Jagdish (Jag) N.Sheth で、彼はインド出身と思われ、“The Rise of China and India and Their Impact on the World”

⁴ AIB Newsletter, vol.12.no.3, p.11.

というテーマでスピーチをおこなった。

さらに、実業界から2名のキーノート・スピーカーが選ばれていた。一人は、中国の海運会社 China Ocean Shipping(Group) Company (COSCO) の社長兼 CEO である Wei Jiafu である。もう一人は、韓国のサムソン研究所中国センター所長(共催機関)の Seung Ho “Sam” Park である。彼は韓国のビジネス研究者であり、多国籍企業に対するコンサルティングに携わっている。彼ら二人は、同じセッション:「アジアの多国籍企業 (Global Competitiveness from the Perspective of Asian Multinationals)」で、共通テーマのもとで、SOSCO と Samsung の活躍について語った。

学会報告に先だって開かれた「元学会会長を囲むラウンドテーブル」はおもしろい企画である。この学会の過去の会長達が、大ホールに並べられたテーブルに座って、それぞれの元会長が自分のテーブルでの座談会を主催するという趣向である。これによって、若い参加者が、著名な長老教授と直接に話すことができるし、彼らの問題意識から研究上の示唆を得ることもできる。このラウンド・テーブルの参加者とテーマは次の通りである。

Jean Bartunek, How Organizations Change ?

Peter Buckle,y, India versus China in the Global Economy

John Daniels. Professional Activity Evolvment through Career and Age Advancement

Peter Dowling, The Important Role of IB in small Population Advanced Economies.

Sida Gray, How can We Best Develop IB in Business Schools?

Duana Kujawa, Evolution of the MNE: From Post WWI America to Globalization.

Chung Ming Lau, Asian Management Research.

Peter Monge, International Organizational Networks

Lyman Porter, Career Management Issues

Jose de la Torre, Fostering IB Education through Dual Degree and Collaborative Programs.

Rosalie Tung, Chinese Management Issues.

William Werther, Why Get Involved in Professional Association ?

前会長達は自分の専門分野からテーマを選んでいるが、同時に、ビジネス教育に関する共通の話題も多かった⁵。

⁵ 筆者は専門分野から、Duana Kujawa 教授の「戦後の直接投資の回顧」のテーブルに座った。実は、筆者は Peter Buckley の「インドと中国」に興味をもったが、予約希望者だけで満席だった。「早いもの勝ちで座っていたらよい。ビジネスと同じ」「途中で休憩があるので、その時に移動すればよい」などと、受付で(アメリカ的な?)率直な助言を受けたが、実行できなかった。

特別セッションで報告されたり、パネル形式で論議された論題は次のようなテーマで、中国を対象にしたものが多い。

China Sourcing: A View from the Coal Face

Watching Out for India's Globalization

FDI in China: Barbarians at Bay?

The Rise of China and India and Their Impact on the World

China and India: Global Competitors, Foes or Phantoms?

Global Competitiveness from the Perspective of Asian Multinational

つぎに、個々の研究報告は、つぎのような10のTrackに分類されている。

Track 1 - Context of Global Business

Track 2 - Economics, Finance, Taxation, Regulation

Track 3 - Managing People Across Culture

Track 4 - International Strategic Management

Track 5 - Entry, Expansion & Operations Strategies

Track 6 - Marketing and Supply-Chain

Track 7 - Learning, Knowledge and Innovation

Track 8 - Offshoring and Outsourcing

Track 9 - Security & International Competitiveness

Track 10 - Internationalization of Asian Firms

これらのTrackによっても設けられたセッションに加えて、パネル報告（プログラムでは **interactive** と称されている）がロビーに、日替わりで展示されていて、報告者が随時、関心をもって立ち寄る研究者に説明をしている。

論文報告とパネル報告の内容を、各Trackにしたがって概観すると次のようになる⁶。

Track 1 は、グローバルゼーションと競争力、グローバル経営と社会的責任、国際経営と新興国、など広範囲であるが、中国に関しては、中国企業の国際競争力、中国とインドとの比較、が格別の関心事である。

Track 2 には、通貨リスク、金融市場、会計制度、租税、規制、などが含まれる。中国

⁶ 研究発表と討論は同時並行的に開催されるので、筆者はその一部の会場にしか実際には出席しなかった。この報告は、学会プログラム、Web 情報、会場での活動によって、まとめたものであり、筆者の誤解や思いこみがあるかも知れない。

については、株式市場の育成、国有企業の株式化、中国企業の透明性、外国企業の進出退出におよぼす中国（政策）要因、などが注目されている。

Track 3 は、異文化経営の問題が、Hofstede の先駆的実証研究⁷、組織・人事、M&A、などに関連して検討されている。中国については、交渉における guanxi（関係、コネ）の重要性、中国の多国籍企業にとっての国際的な人的資源、外国人の中国での生活経験、について議論されていた。

Track4 は、集中と多様化、技術と国際化、ハイテク・ベンチャー、統合と分散など、国際的な経営戦略に関する論文である。中国に関しては、海賊版、国際提携、中国企業におけるエージェンシーやガバナンス、が論議された。

Track 5 では、参入退出、合併ベンチャー、進出適地選択、輸出、現地調達、企業行動に関する規制、M&A、などが扱われる。中国に関しては、進出子会社の所有形態、中国国内の地域間競争、進出先の選択、地場企業との競争など、中国への企業進出の経験に関する報告が多い。

Track6 は、マーケティングやサプライチェーンで、中国に関しては、中国ソース、バイヤー・サプライヤー関係、自動車サプライヤー連携、都市部におけるマーケティングなど、国際化・市場化にともなうテーマが豊富である。

Track 7 は、イノベーション、ナレッジ源泉、ナレッジ波及、連携およびネットワークによる学習、に関するもので、多国籍企業を通じるトランスファーの中国経済への効果に関心事であることはいうまでもない。加えて、海外子会社のナレッジ能力、中国企業の R&D 能力、が注目されている。

Track 8 は、海外アウトソーシングに関するもので、内部化、ブランド、中国にとって重要なテーマである。

Track9 は、セキュリティに関するもので、具体的には海賊版、テロ、安全対策などである。

Track10 は、アジア企業の国際化に関するもので、報告の多い分野であった。中国に関しては、文化と国際化、多国籍企業の誕生、国際化のための条件、などである。

第3節 中国経済研究への意義

キーノートのテーマでわかるように、中国への外国投資、中国企業の海外進出、中国と

⁷ 「異文化理解」が一つのパラダイムになっている。G・ホフステード著・萬成博・安藤文四郎監訳『経営文化の国際比較』産業能率大学出版部、1984年、および岩井紀子・岩井八郎訳『多文化世界』有斐閣、1995。

インドの経済発展の比較、北東アジア（韓国、中国）の多国籍企業の可能性、などがこの北京での国際会議の特徴的なテーマである。

中国は外資受入国として注目されてきたが、中国政府は現在、「走出去」戦略として、海外への中国企業の進出に強い期待をもっている⁸。すでに 2001 年度からの「第 10 次 5 カ年計画」において、中国企業の海外進出を奨励しているが、2004 年になってようやく具体的なガイドラインが発表され、「中国企業の歴史的な大転換」と称した。現在、豊富な外貨準備に支えられて、製造業、資源開発、国際サービス業などにおける海外進出が現実検討されている。まず、中国企業の国際競争力がどの程度なのか。この点の検証が必要であろう。今後、中国企業の海外進出が、どの程度まで拡大するかは不明であるが、注目すべきである。

インドもまた、多国籍企業の受入国として中国とならんで注目されている。インドへの関心は、とくに欧米企業には、強いように思われる。インドへの企業進出に関する言及は少なかったが、Chindia(チンディア) と呼ばれる両大国の将来について、両国の比較優位、ライバル関係、などに関心をもつ報告や発言が多く見られた。

中国経済の台頭が国際経営学や企業戦略の研究にどのような影響を与えつつあるかという問題意識が、上記の Track 毎に紹介したように、諸処に見られたように思われる。この点について、日本企業の経験も有益な事例となるであろう。日本については、本大会に先立って The Association for Japanese Business Studies (AIBS) のコンファレンスが開催され、本プログラムにも A J B S 特別セッションが組み込まれていた。

ただ、中国経済における民間企業の組織、管理、意思決定などの具体的な姿が、まだ見えてこないのも事実ではないだろうか。中国企業の海外進出によって、海外において、その一端が観察されることになれば、興味深いこととなろう。

最後に、国際ビジネス研究の碩学であり、本学会にも出席していた John Dunning 博士は、この学会の機関誌 Insights (Vol.6, No.2, 2006) の直近号において、'New Directions in International Business Research' と題する興味深い小論を寄稿しているので紹介する。

ダニング教授によれば、振り返ると、国際ビジネス研究は 3 つの転換点を経てきた。まず 1950 年代後半から 60 年代の頃、国際ビジネス研究は、主にアメリカ企業の国際化を背景にして、始まり、60 年代の世界経済のグローバル化とともに研究が進んだ。ただ、この時期は、physical environment (PE) のコンテクストに終始し、human environment (HE) の側面は軽視された。前者は資本要素や人的資源が富を生み出す最大化行動（新古典派的

⁸ 王曙光「本格化する中国企業の海外展開」東アジアへの視点、2006 年 12 月号 (17 巻 4 号)、pp.1-10 参照。この筆者は、ほぼ同時期 (2006 年 6 月 20 日) に (おそらく同じ北京の国際会議場で) 開催された「世界華人フォーラム」に出席して、「官民一体で海外進出事業を拡大する意気込みの強さを実感した」と記述されている。

一筆者注)に注目している。他方、後者(HE)については、Douglas North の表現に利用して、the compilation of rules, norms and conventions and way of doing things that define the framework of human interaction と性格づけている。

さて、第1の転換点は1970年代初頭である。多国籍企業は、国際連合などで次第に批判の対象となり、その行動は法律や規制にしばられるようになった。

第2の転換点は1980年代初頭に起こる。ベルリンの壁が崩壊して、市場経済が世界に広がる(中国経済の改革開放も同様である一筆者注)。過去20年間、知識と情報がPEの主要な内容となった。

そして、1990年代半ばに、第三の転換点 came。その新しい方向は the renewed and burgeoning interest in various aspect of HE and its ecological components と表現される。これまでのPE中心の努力は、国際ビジネスの成功にとって、必要条件ではあるが十分条件ではない。

この新しい方向を信じる理由として、ダニングは、5つの理由を述べている。第1は、グローバリゼーションがおよぼすPEとHEへの影響である。すなわち、異なる文化や制度のもとでのPEとHEが認識される。第2は、個人や組織の経済的社会的目的が多様化したり広がったことである。第3は、多様な「市場の失敗」の増加である。第4は、新しい経済一特に中国とインドの国際舞台への登場による。同時に、多国籍企業の活動が再び活発になったことである。両国の活気は、PEとHEの両方に影響を与える。第6は、国際ビジネスの組織形態が多様化されつつあることである。

ダニングは、結論として、第一に、国際ビジネスの成功はHEの理解にかかっている。第2に、社会資本やそれぞれの国の経済的社会的厚生に重視する。第3に、進化する人間環境に注目して、制度的、国際的、インターフェイス的な展望をもつことが必要である。国際ビジネス研究は、PEだけではなくHEを重視する必要がある。これがダニング博士の主張である。

中国の勃興のみがHE重視の論調を強めているわけではないが、国際企業の受入国としての中国やインドが、グローバリゼーションから真に恩恵を受けるためには、国際ビジネスはPEだけではなく、HEを重視しなければならないし、また、そうでなければ、国際ビジネスとしても成功しないであろう。

(以上)

参 考 文 献

James C. Baker, John K. Ryan, Jr. Donald G. Howard (1988), *International Business Classics*, Lexington Books, (J・B・ベーカー＝J・K・ライアンズ、Jr.＝D・G・ハワード編 中嶋潤＝首藤信彦＝安室憲一＝鈴木典比古＝江夏健一監訳 AIB JAPN 訳 (1990)『国際ビジネス・クラシックス』文眞堂

Robert Z. Aliber and Reid W. Click (editors) (1993), *Readings in International Business: A Decision Approach*, The MIT Press)

Mark Casson (2000), *Economics of International Business*, A New Research Agenda, Edward Elgar (M. カソン、江夏健一・桑名義晴・大東和武司 (2005)『国際ビジネス・エコノミックスー新しい研究課題とその方向性』文眞堂)

Geofrrey Jones (1995), *The Evolution of International Business: An Introduction*, International Thompson Business Press (ジェフリー・ジョーンズ著、桑原哲也・安室憲一・川辺信雄・榎本悟・梅野巨利訳 (1998)『国際ビジネスの進化』有斐閣)

Alan M. Rugman, Donald J Lecraw, Laurence D. Booth (1985), *International Business: Firms and Environment*, McGraw-Hill (A.M. ラグマン・D.J.ルクロウ・L.D.ブース著、中嶋潤・安室憲一・江夏健一監訳多国籍企業研究会訳 (1987)『インターナショナル ビジネス 企業と環境 (上・下)』マグローヒル)

亀井正義 (2001)『企業国際化の理論ー直接投資と多国籍企業』中央経済社

島田克美 (2001)『概説海外直接投資論 (第二版)』学文社

安室憲一著 (1993)『国際経営』日経文庫、日本経済新聞社

吉原英樹著 (1997)『国際経営』有斐閣アルマ、有斐閣

吉原英樹著 (2005)『国際経営論』放送大学教材、日本放送出版会